

2021. 1. 10 1月第二主日礼拝

ハガイ 2 : 1-9 「ともにいる、強くあれ」

聖書

- 1 第七の月の二十一日に、預言者ハガイを通して、次のような主のことばがあった。
- 2 「シェアルティエルの子、ユダの総督ゼルバベルと、エホツァダクの子、大祭司ヨシュアと、民の残りの者に次のように言え。
- 3 『あなたがたの中で、かつての栄光に輝くこの宮を見たことがある、生き残りの者はだれか。あなたがたは今、これをどう見ているのか。あなたがたの目には、まるで無いに等しいのではないか。
- 4 しかし今、ゼルバベルよ、強くあれ。—主のことば—エホツァダクの子、大祭司ヨシュアよ、強くあれ。この国のすべての民よ、強くあれ。—主のことば—仕事に取りかかれ。わたしがあなたがたとともにいるからだ。—万軍の主のことば—
- 5 あなたがたがエジプトから出て来たとき、わたしがあなたがたと結んだ約束により、わたしの霊はあなたがたの間にとどまっている。恐れるな。』
- 6 まことに、万軍の主はこう言われる。『間もなく、もう一度、わたしは天と地、海と陸を揺り動かす。
- 7 わたしはすべての国々を揺り動かす。すべての国々の宝物がもたらされ、わたしはこの宮を栄光で満たす。—万軍の主は言われる—
- 8 銀はわたしのもの。金もわたしのもの。—万軍の主のことば—
- 9 この宮のこれから後の栄光は、先のものにまさる。—万軍の主は言われる—この場所にわたしは平和を与える。—万軍の主のことば。』

はじめに

先週は 2021 年最初の礼拝でしたので、今年の教会標語「祝福の扉を拓く」（ハガイ 2:18, 19）について心を向けました。新型コロナウイルスの影響で 2020 年は多くのことができずでした。その事実を受け止め、今年は昨年

できなかったことを成し遂げようと立ち上がることも考えられますが、果たしてそのような方向性が良いのか祈る中で、今年は2020年の踏み直しとするのではなく、新しい扉を拓く準備の年とするように導かれました。折しも感染症は収束する気配を見せておらず、昨年の踏み直しをしようにも環境が整っていないので踏み出しようがありません。それなら、社会がどのように変化していくのか不透明感は拭えませんが、ここで一度立ち止まり、これからの教会の在り方などをじっくり考え、できるところから行動に移していくことが良いと導かれました。今日の礼拝は、立ち止まることの意味とそこに注がれた神さまの御心について学びたいと願っています。

1. 積極的な意味での立ち止まり

神さまは私たちに「今日から後のことをよく考えよ」(2:15, 18)とされます。考えるためには、立ち止まる必要があります。立ち止まるということは、今までの活動を停止するというものではありません。また今年は何も行わない(取り組まない)ということでもありません。立ち止まることは、去年までの歩みを単に踏襲するのではなく、その意味や行いなどを考えてみようということです。考えてみた結果、今までと同じように行う働きもあるでしょうし、改善して継続する働きもあるでしょう。またはこれまでの活動を改めて新しくする取り組みもあるかもしれません。いずれにしても前進するための立ち止まりですから、非常に積極的な意味を持っています。

立ち止まり、考えることを可能にさせるために大切なことは当事者性です。もし課題が見つかったらそれを自分のこととして受け止め、どうしたらよいのかと祈りつつお互いの意思を分かち合うことです。問題や課題を一部の人のこととして片づけてしまわず、一緒に担う姿勢が大事です。良きサマリヤ人のたとえ話のように(ルカ 10:25-37)、他人ごとにしてしまったらそこから良いものは生まれてこないでしょう。その意味で、立ち止まることは重荷ともなり、場合によっては課題の大きさに圧倒されて気持ちが沈んでしまうこともあり得るのです。まさにハガイを通して神殿再建工事の再開が語られ

たときの民の姿がそれで、事の大きさに「民は主の前で恐れた。」(1:12) のです。主は大きな問題の前に立ち恐れを覚える民の霊を奮い立たせたので、民は「自分たちの神、万軍の主の宮に行き、仕事に取りかか」(1:14) りました。この工事が当事者性をもって自分たちの問題となったのです。

2. 厳しい現実

ハガイに神さまのことばが臨んだのは、「ダレイオス王の第二年、第六の月一日」(ハガイ 1:1) でした。これは紀元前 520 年の 8~9 月を指します。ハガイのメッセージから 23 日後に再建工事がスタートしました (1:15)。それから約一ヶ月後再びハガイに神さまのことばが臨みました。それが今朝の聖書箇所です。工事に取りかかってまだ一ヶ月。なぜこのタイミングで主の励ましのことばが臨んだのでしょうか。

ハガイがメッセージを語った時のイスラエルの状況は決して潤っていたわけではなく、多くの欠乏による困窮の時代でした。種を蒔いても収穫は僅か、食べても満ち足りない、飲んでも酔うことがない、衣を着ても温まらない、金を稼いでも穴の開いた袋に入れるだけ、地は産物を出すのをやめ、日照りを呼び寄せた (1:6-11) ということばが表わしているように希望のない時代でした。とても再建工事にあたるだけの力はないのが実際でした。そこへもってきて、かつてのソロモン神殿の時とは違い、人材 (職人)・資材・資金とも圧倒的に少なく失望するしかなかったのです。「あなたがたの中で、かつての栄光に輝くこの宮を見たことがある、生き残りの者はだれか。」(3 節) とあります。ソロモン神殿がバビロンによって破壊されたのが紀元前 586 年。それから 66 年後の 520 年にハガイが語ったわけですから、ソロモン神殿を幼少期に見ている民は、今 70 代に入っています。荘厳なソロモン神殿を記憶に残している民からすれば、今あるのはあまりにもみすぼらしく「まるで無いに等しいではないか」と映りました。

過去の栄光が強く脳裏に刻まれている人は、現状が厳しいとつい過去を懐

かしみ現状否定に走りやすいです。インマヌエル豊田教会でも過去に多くの人で満ちた時代がありました。過去の教会の様子をご存知の方は、現状をどのように見ておられるでしょうか。当時のイスラエルの民と同じように見ている方もおられるかもしれません。昨今子どもたちを教会に迎えることが難しくなっていますが、今から40年ほど前は子供たちが50名以上集っていた時代がありました。教会は右肩上がりです。受洗者も起こされ礼拝出席者も年々増加して行きました。こうした過去の歴史を知っておられる方から見ると、今は何か活気がなく寂しく感じておられる方がいてもおかしくありません。先が見通しにくく希望が持ちにくい点はハガイが語った時代とどことなく似ているように思います。今私たちは時代的にも暗雲が立ち込めるような中で、特別な励ましが必要に思います。2021年の初めに、強い励ましを人間的なものに求めるのではなく神さまに求めましょう。神さまは「強くあれ、強くあれ、強くあれ」（4節）と力強く私たちに励ましのことばをかけてくださいますから、主の声をしっかりと聞かせていただきたいです。

3. 主がともにいるから

神さまは指導者ゼルバベルと大祭司ヨシュアとすべての国民に「強くあれ、強くあれ、強くあれ」と3回声をかけています。強くあれ＝恐れるなということですが、その根拠が「わたしがあなたがたとともにいるからだ。」（4節）のひと言にあります。目の前は困難な状況かもしれません。しかし、主がともにおられるのですから、主を信頼して強く、恐れなく、「仕事に取りかかる」ことが求められています。

主がともにいてくださることを5節で「あなたがたがエジプトから出て来たとき、わたしがあなたがたと結んだ約束により、わたしの霊はあなたがたの間にとどまっている。恐れるな。』と言ひ、出エジプトの出来事を思い起こさせています。神さまはイスラエルの民がエジプトから脱出したときの約束を覚えておられ、一時的にバビロンに捕囚となって連れて行かれても、それが約束を破棄する理由にはなっていないのです。バビロン捕囚はイスラエル

の罪の結果ですが、それによって約束が無効になったのではありません。このことは私たちに大きな励ましを与えるものです。出エジプトの出来事は救いのひな型であり、私たちがイエスさまを信じて救われたことと重ねることができます。イエスさまを信じて今日まで歩いて来たお互いですが、その間に数多くの過ちや失敗や罪を重ねて来たかもしれません。しかし神さまはそれをもって私たちの救いをなかつたことにはなさらず、昔も今もいつも神さまの霊である御霊はともにいてくださるのです。この主の同行こそが真の励ましとなり得ることをこの朝の礼拝で確認したいのです。

4. 後の栄光

2021年先行きは不透明ですが、私たちの将来には主がともにおられるゆえに希望があります。「わたしはこの宮を栄光で満たす。」(7節)、「この宮のこれから後の栄光は、先のものにまさる。この場所にわたしは平和を与える。」(9節)と約束してくださいました。

ソロモン時代の神殿と今ここで再建されようとしている神殿とは、建物としての栄光はソロモン神殿の方がはるかに勝っています。しかし、主をご覧になっておられるのは建物の荘厳さや立派さではありません。どんなに立派な建物を持っていても、そこに主を礼拝する民がいなければ空しいです。もっと言えば、主の民がいてもそこに平和がなければ主はともにおられるとは言えないかもしれません。「この場所にわたしは平和を与える」と約束された神さまは、これをイエス・キリストによって成し遂げてくださいました。「わたしはこの宮を栄光で満たす。」(7節)とは直接的には今再建工事に取っかかっている神殿を指すでしょうが、新約の光を当ててみると、「宮」とは教会を指し、信仰者一人一人を指すことが分かります。「あなたがたのからは、…神から受けた聖霊の宮」(Iコリント 6:19)とありますように、主はこれからも教会と信仰者一人一人とともにいてくださり、ご自分の栄光と平和をそこに実現させてくださるのです。ぜひその約束を握って今年を出発しましょう。教会においても個人においても、これからの歩みに主は祝福を用意し

てくださっています。

まとめ

2021年の出発にあたり、主がともにいてくださるから強くあれ、強くあれ、強くあれと力強く励ましてくださいました。仮に難しい時代に入って行ったとしても、主がともにいてくださることに励ましを得て、しっかり前を向いて歩いて行きましょう。そうするなら、「これから後の栄光は先のものにまさる」という約束が本当であることを体験できるでしょう。今年の「祝福の扉を拓く」はイメージで言うなら末広りのイメージです。主がともにおられますから、どんな困難があっても希望を持って前進しましょう。